黒田垣外遺跡

1998・2

飯田市教育委員会

黒田垣外遺跡

1998・2

飯田市教育委員会

序

飯田市は自然条件に恵まれ、また、古来より交通の要衝に位置しており、埋蔵文化財のみならず、多くの文化財が今日まで残されています。今回発掘調査の行なわれた飯田市上郷地区にも、300年余り続く人形浄瑠璃の黒田人形芝居が伝承されており、下黒田諏訪神社の祭礼で、毎年奉納上演されています。また、舞台は重要有形民族史料に指定されており、現在でも黒田人形芝居の舞台として活用されています。一方、埋蔵文化財については近年、多くの開発により、その包蔵地の姿が変わりつつあります。それに伴う発掘調査により、当地方の古代の様子が明かになりつつありますが、それと引き換えに、後世に伝えるべき文化財が姿を消していると言えます。

上郷地区は元々は、農業を基盤とする地域でありましたが、飯田市街地に近い事から最近では宅地化が進み、道路も整備されつつあります。今回調査された所も、桑園でありましたが県道飯島・飯田線のバイパス工事に伴う代替地として宅地造成が行なわれるとのことです。現在では農業後継者が不足しているため、多くの農地が宅地として形を替えつつあります。こうした流れの中で、多くの埋蔵文化財が消滅の危機にさらされています。

古来より伝わる様々な文化財は、今日の私たちの地域社会や文化を形成するまでの過程を明かにするものであり、現在の私たちの生活の基となっているものです。本来、私たちはこれらの文化財を、そのまま後世に伝える責任を持っています。しかしながら、私たちはより良い環境で生活をする権利も有しています。この文化財保護と開発という問題は、相容れぬものを多く抱えており、常に私たちを悩ますものであります。特に近年、大きな開発事業が続く中でこのような問題に直面する機会も多くなっています。このような場合、次善の策ではありますが開発対象地を調査し、その記録を後世に伝える事もやむを得ないことと言えるでしょう。

最後になりましたが、文化財保護の趣旨に深いご理解をいただき、調査実施に際しては多大なご協力を得ました関係機関各位及び発掘作業・整理作業に従事されました作業員の皆様に心より感謝を申し上げまして、刊行の言葉といたします。

飯田市教育委員会

教育長　小林 恭之助

例　　言

1　本報告書は平成８年度県道飯島・飯田線バイパス工事に伴う市道改良工事に先立ち実施した、飯田市上郷地区所在の埋蔵文化財包蔵地黒田垣外遺跡の緊急調査報告書である。

2　発掘調査は飯田市建設部からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。

3　本調査は平成９年２月に現場作業を行い、平成９年４月から整理作業及び報告書作成を行った。

4　発掘調査及び整理作業は一貫して、遺跡名に略号ＫＩＴ1682－１を用いた。

5　今次調査は、昭和62年度及び昭和63年度に上郷町教育委員会により行われた同遺跡発掘調査の実績を踏まえ、遺構番号を付けることとした。

6　調査区の設定は飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づき㈱ジャステックに委託実施した。調査地点の番号はＬＣ75－16である。

7　本書は調査員全体で協議の上、伊藤尚志が編集・執筆し、小林正春が総括を行った。

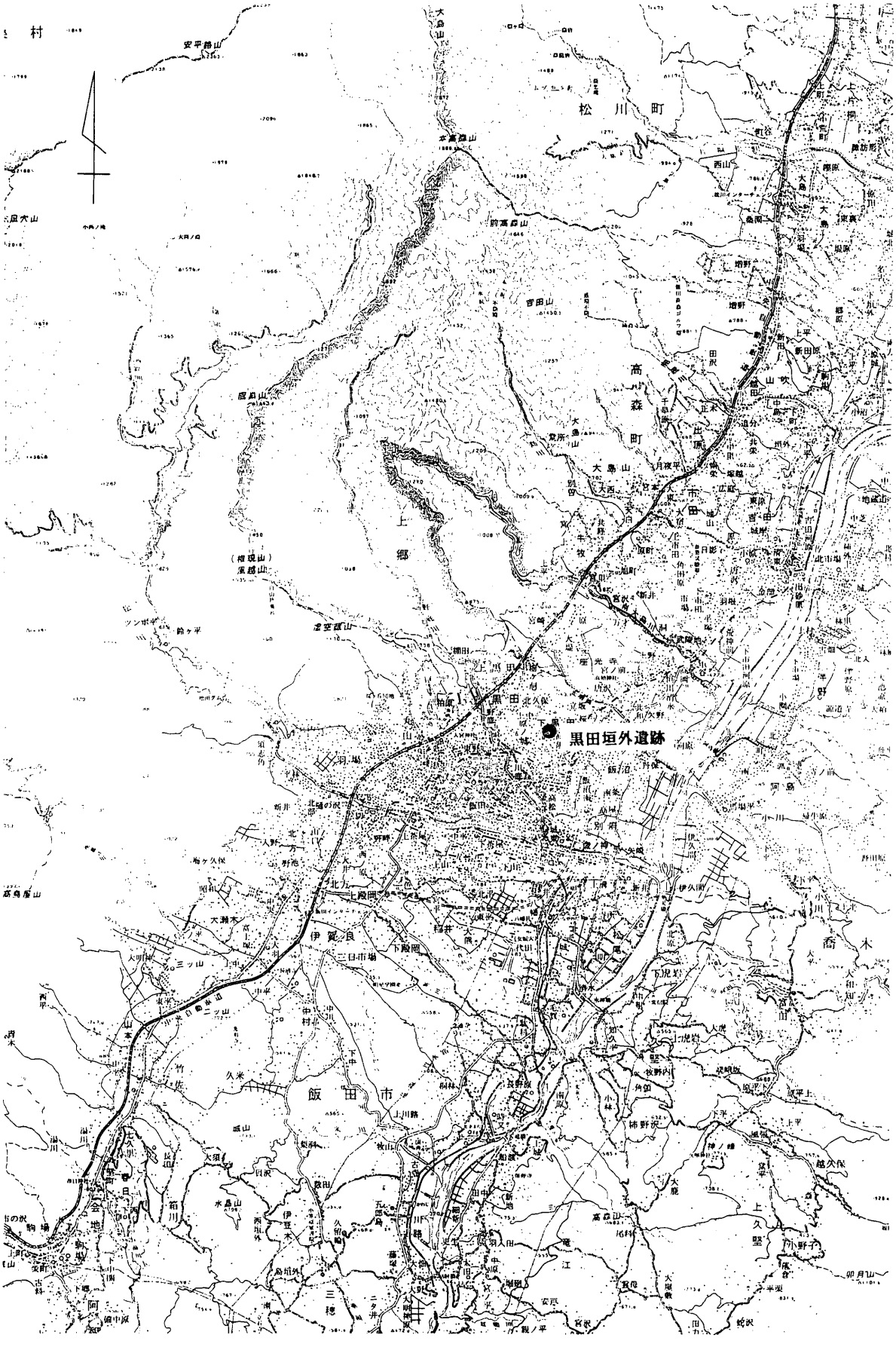
8　当遺跡で出土した遺物及び記録された図面・写真は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本 文 目 次

序
例言
目次
Ⅰ　経過 …… 2
　1　調査に至までの経過 …… 2
　2　調査の経過 …… 2
　3　調査組織 …… 2
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 5
　1　自然環境 …… 5
　2　歴史的環境 …… 5
Ⅲ　調査結果 …… 9
　1　基本層序 …… 9
　2　住居址 …… 9
　3　建物址 …… 10
　4　溝址 …… 10
　5　土坑 …… 13
Ⅳ　まとめ …… 16
　遺物図版 …… 17
　写真図版 …… 19
　抄録 …… 25

挿図目次

挿図1　黒田垣外遺跡位置図 …… 1
挿図2　調査位置及び周辺遺跡図 …… 4
挿図3　基準メッシュ図区画調査位置 …… 7
挿図4　黒田垣外遺跡全体図 …… 8
挿図5　46号住居址 …… 9
挿図6　47号住居址 …… 10
挿図7　48号住居址 …… 11
挿図8　建物址7 …… 12
挿図9　溝址19 …… 13
挿図10　土坑 110 …… 13
挿図11　周辺ピット図 (1) …… 14
挿図12　周辺ピット図 (2) …… 15



挿図１　黒田垣外遺跡位置図

Ⅰ 経　　過

1　調査に至までの経過

県道飯島・飯田線バイパス工事に伴う住宅移転の代替地として、埋蔵文化財包蔵地である垣外遺跡の一角が選定され、それに伴い当該地に道路の新設が必要となった。当該地は近年宅地化が急速に進んでいる地域で、諸般の事情から当該地が代替地となったことはやむを得ない事であり、宅地として利用するためには道路の新設は必要不可欠であった。

飯田市国県道対策課から平成８年11月29日に本計画の通知が出されたのに伴い、県・飯田市教育委員会及び飯田市国県道対策課の間で保護協議を行ない、試掘調査を行なった上で再度協議を行なう事となった。平成９年１月に試掘調査を行なったところ、計画された道路２本のうち、北側の道路部分では遺構・遺物は確認されなかったが、南側の道路部分では住居址と、それに伴うと思われる遺物が確認された。再協議の結果、遺構・遺物の確認された南側の道路部分を発掘調査し、記録保存する事となった。

また、宅地部分については、別途協議をすることとなった。

2　調査の経過

調査作業を効率的に進めるため調査区を、１度目に調査をするところ２区画、２度目に調査をするところ２区画の計４区画に分け、２度にわたり調査を行なうことにした。そして、当面調査しない区画に排土処理をすることにした。１度目の調査は２月１日に重機で表土を剥ぎ、２月４日に㈱ジャステックに基準点測量を行なってもらい、同日より作業員を入れ、遺構検出作業及び遺構掘り下げ作業を行なった。遺構掘り下げ作業・写真撮影は２月７日に終り、同日に現場での実測作業も終了した。２月11日に重機で排土の返し作業と表土剥ぎ作業を行なった。２月12日に㈱ジャステックに２度目の調査区の基準点測量を行なってもらい、同日に調査作業を再開した。２月14日に現場での全ての作業を終了した。平成９年度において、飯田市考古資料館で整理作業を行ない本報告書の作成を行なった。

3　調査組織

(1)　調査団

調査主体者　　飯田市教育委員会　教育長　小林恭之助

調査担当者　　伊藤尚志

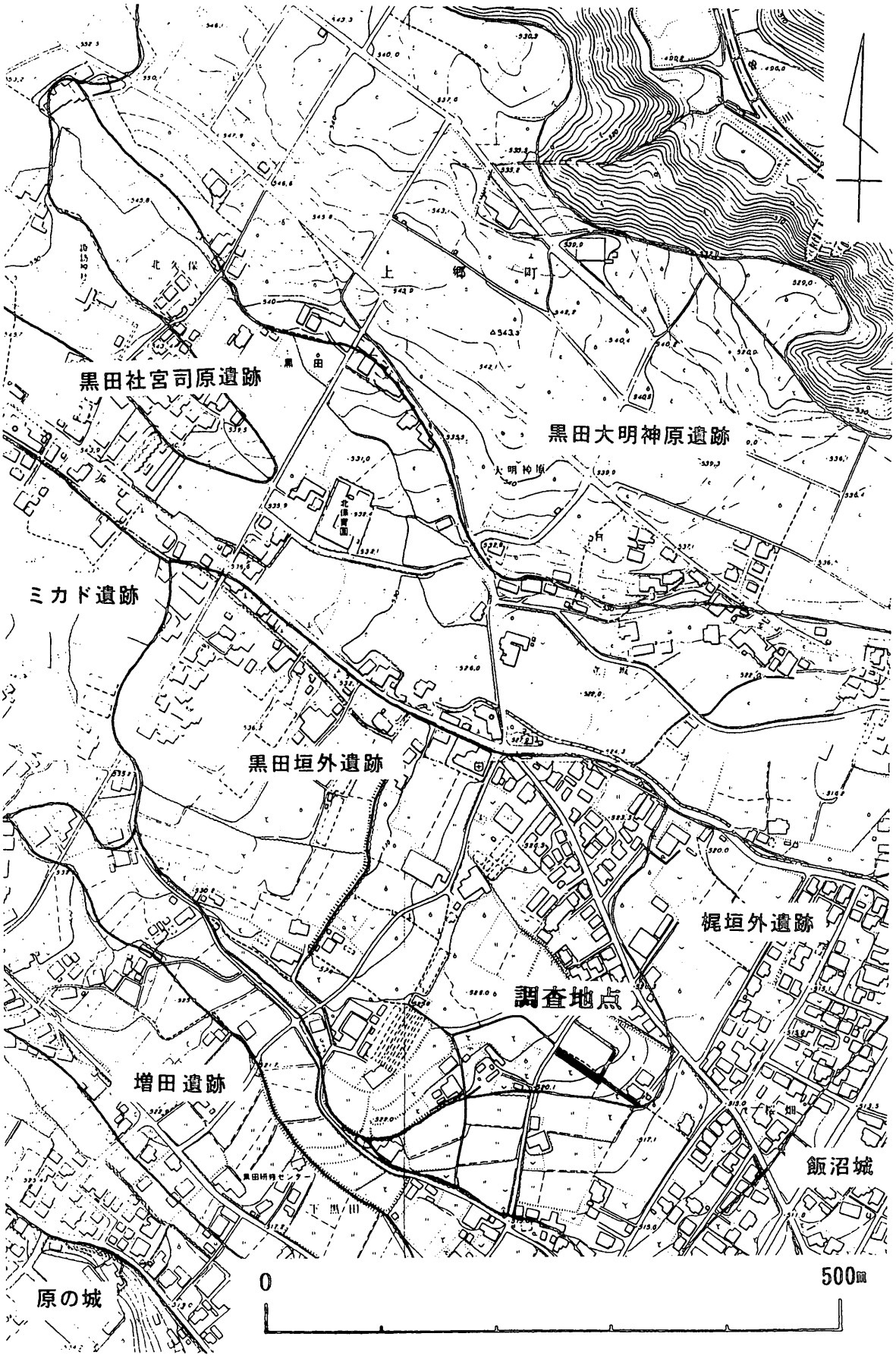
調　査　員　　佐々木嘉和・吉川　豊・山下誠一・馬場保之・吉川金利・下平博行・福沢好晃
　　鳴海紀彦

作　業　員　　新井幸子・伊坪　節・伊東裕子・太田沢男・奥村栄子・北原　裕・木下早苗・瀬古郁保・竹本常子・田中　薫・筒井千恵子・樋本宣子・藤本　宏・古林登志子・牧内八代・松島　保

(2) 事務局

飯田市教育委員会博物館課

矢沢与平　（博物館課長　平成８年度）
小畑伊之助　（　〃　平成９年度）
小林正春　（博物館課埋蔵文化財係長）
山下誠一　（博物館課埋蔵文化財係）
吉川　豊　（　〃　）
馬場保之　（　〃　）
吉川金利　（　〃　）
下平博行　（　〃　）
伊藤尚志　（　〃　）
福澤好晃　（　〃　）
牧内　功　（博物館課庶務係）



挿図２　調査位置及び周辺遺跡図

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　自然環境

黒田垣外遺跡の所在する飯田市上郷地区は長野県の南端を南北に並走する赤石山脈・木曽山脈の間に広がる飯田盆地のほぼ中央に位置する。北西に野底山・鷹巣山があり、そこを源として野底川が飯田松川に、土曽川が天竜川に、南流し注いでいる。この野底川を境にして西は飯田市街地に、東は土曽川を挟んで飯田市座光寺地区に隣接している。当地区は野底川・土曽川、そして南を天竜川に挟まれた、東西に細長く緩やかに傾斜しており、面積は約26㎢ある。一帯は天竜川とその支流により形成された河岸段丘・扇状地及び、天竜川に平行する活断層によって形成された段丘上に、古来から現在に至までさまざまな人々が生活を営んでいる。

『下伊那の地質解説』によれば、伊那谷の段丘は火山灰土の堆積を基準として高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・Ⅱに大きく編年されている。上郷地区の地形の特徴として、中央部を南北に横断する大段丘があり、これを境として俗に上段（うわだん）と呼称される洪積土壌地帯の中位段丘及び低位段丘Ⅰと、下段（しただん）と呼ばれる沖積土壌面の低位段丘Ⅱが見られ、その段丘崖の高比は約50ｍを測る。中位段丘・低位段丘Ⅰ地帯は天竜川の現河床面海抜398ｍとの比高差200～80ｍを測り、野底山山麓から南東方向に緩やかに傾斜する広大な地域を占めており、野底川による新規扇状地が発達し、総体とすれば乾燥した台地をなしている。中位段丘・低位段丘Ⅰ地帯は三大別でき、南東側に原の城遺跡の立地する中位段丘下殿岡面、北東側に黒田大明神原遺跡の立地する中位段丘八幡原面があり、いずれも細長く小高い丘陵地形を呈している。黒田垣外遺跡は、この間の低位段丘Ⅰ伊久間面に立地している。

当地の低位段丘Ⅰ伊久間面は海抜520～560ｍを測る２×１㎞の広い範囲である。両側を先述した通り、原の城・大明神原の二つの台地に挟まれているが、さらに微地形を見ると、中央に幅約50ｍの凹地帯がＳ字状に存在し、その両側が南東方向に緩やかに傾斜をなした微高地となり、古代集落の痕跡を残している。黒田垣外遺跡は、この中央凹地の南東寄りに立地し、対面に増田遺跡、北西側に連続してツルサシ遺跡が存在する。ツルサシ遺跡に対峙するミカド遺跡も含めこれらの遺跡は密接な関係を持っていたと言える。

2　歴史的環境

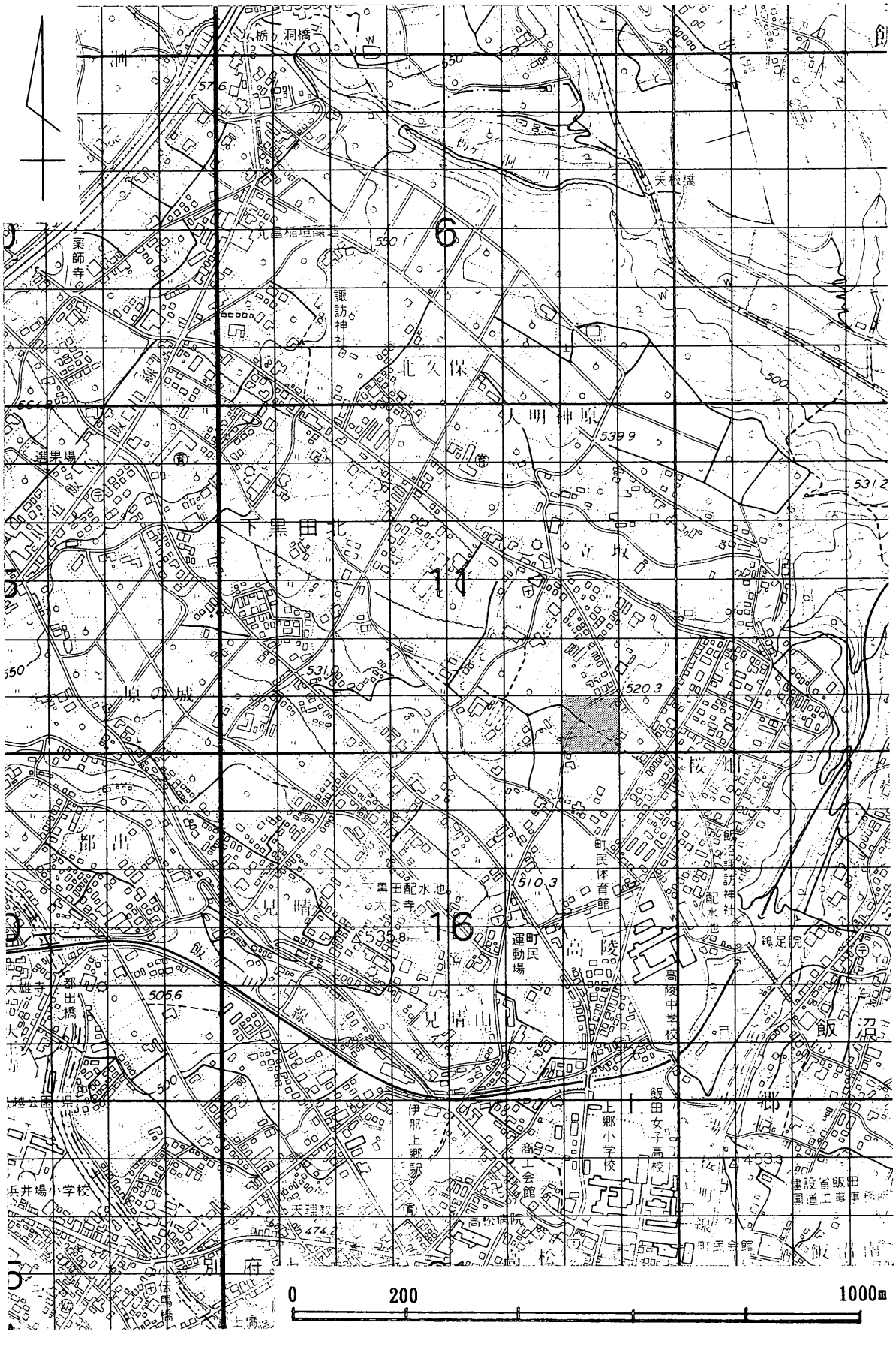
上郷地区の歴史的変遷を概観してみると、1200年以前の旧石器時代の遺構・遺物は現在のところ確認されていない。当地区の最古の文化は、上段の姫宮遺跡出土の表裏縄文式土器と、同じく黒田柏原遺跡（柏原Ａ遺跡）出土の石器剥片とにより縄文時代草創期からその黎明をしることができる。次の縄文時代早期になると比較的山に寄った八王子遺跡など５遺跡から、押型文土器や繊維を含む条痕文土器及び撚糸文土器が出土しており、平成元年の西浦遺跡の調査において押型文の住居址が確認されている。1600年前の縄文時代前期の遺跡は姫宮・日影林・黒田大明神原など８遺跡があるが、いずれも上段の注

意段丘と低位段丘Ⅰ地帯であり、下段の飯沼・別府地域からの発見がなく、沖積地帯への進出はなかったと考えられていたが、昭和62年度の矢崎遺跡発掘調査において前期後半の竪穴住居址が確認され、見直しが必要となった。縄文中期になると低位段丘Ⅱ地帯の南条面下段を除き、上郷地区全域に遺物の散布が確認さており、人々の生活の舞台が拡散したことを示している。しかし、縄文時代後期及び晩期になると遺跡は極端に減少し、後期では上段を中心にして8遺跡、晩期では3遺跡が認められるのみである。

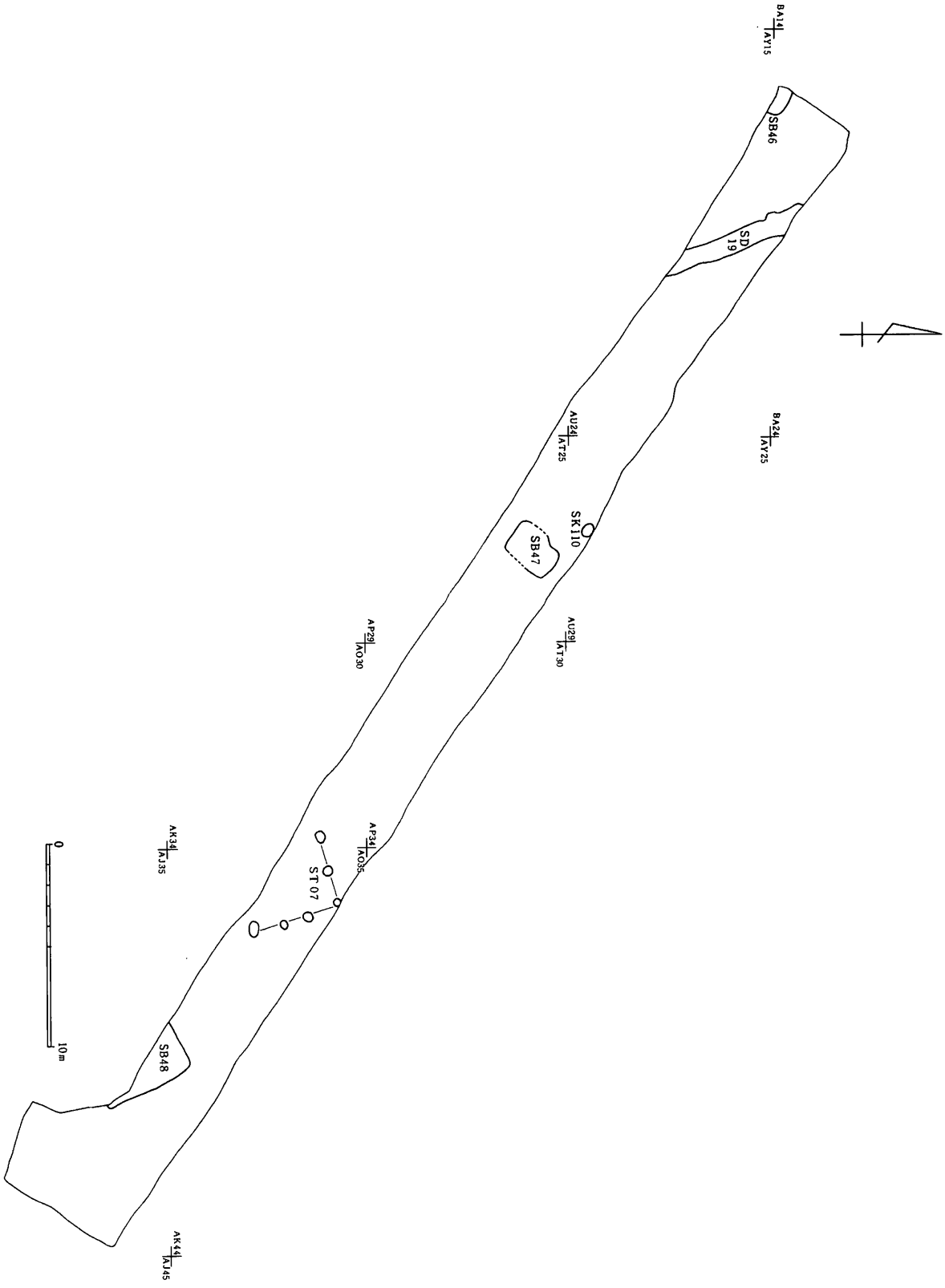
弥生時代は水稲栽培を基盤とする新しい文化であり、下伊那地方へは美濃・尾張・三河地方から東漸したものと推定されている。弥生時代前期の遺物は少なく、中期に至って遺跡数が増大する。特に南条面に立地する飯沼棚田遺跡は、県下初の弥生時代の水田址が発見されたことで有名である。また、該期の遺跡の大半は下段の飯沼・別府地積に集中することから、低位段丘Ⅱ地帯にみられた湿地帯を利用しての水稲耕作が類推されている。約1800年前の弥生時代後期になると、遺跡数はさらに増加し、山麓地帯から天竜川氾濫原にまでその広がりを見ることができる。

上郷地区の古墳は煙滅古墳も含めて36基が確認されており、その多くは別府地籍の台地端に立地する。集落は現在までのところ上段には見られず、下段の経済基盤の豊かな地域を中心に展開していたものと考えられる。奈良・平安時代の遺物は地区内全般で見ることができる。中でも昭和62年度の矢崎遺跡調査では平安時代の大きな集落址が確認され、また大規模な鍛冶遺構の検出とフイゴの羽口や鉄滓等の遺物出土により、同遺跡は上郷地区内でも重要な遺跡となっている。この低位段丘Ⅱ地帯は古代伊那郡衙址の座光寺恒川遺跡群と同一段丘上にあり古代条里遺構の存在が地割や地名から推測される地帯であり、古代史研究上注目すべき地域である。また、海抜410mラインは古代東山道の通過候補地になっている。この地方は『和妙抄』・『伊呂波字類抄』等の文献から古代伊那郡のひとつ麻績郷に属し、平安時代末期には近衛家領の郷戸庄であった。

近年上郷地区も圃場整備・道路整備等事業及び諸開発に伴い、多くの発掘調査が行われ古代の様子がすこしづづ明らかにされつつある。黒田垣外遺跡では、昭和62年に小規模排水対策特別事業に伴い当遺跡内の北西部分で4か所、また昭和63年にも当該地北東側に隣接する道路の新設工事に伴い発掘調査が行なわれ、縄文時代中期・弥生時代後期・奈良時代・中世の竪穴住居址、弥生時代方形周溝墓及び中世の建物址等が確認されている。（ツルサシ遺跡・ミカド遺跡・増田遺跡・垣外遺跡1989上郷町教育委員会）その後、昭和63年に町道建設に先立って行なわれた調査でも古墳時代の住居址等が確認されている。



挿図3　基準メッシュ図　区画調査位置



挿図４　黒田垣外遺跡全体図

Ⅲ 調 査 結 果

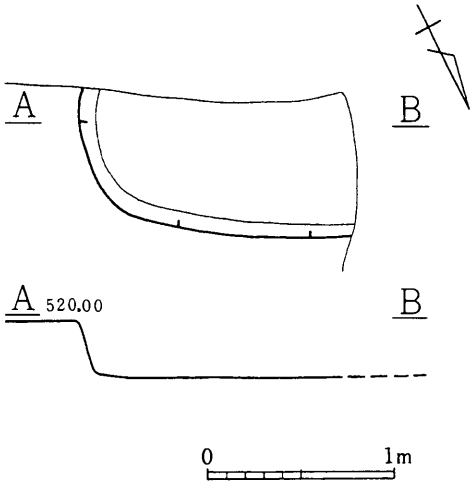
1 基本層序

今次調査地は比較的耕土が厚く、おおむね60cmである。その下は部分的には厚いところもあったが、平均的には10cm程の暗褐色の漸移層があり、地山のローム層となる。遺構の掘り込みは断面を見る限り漸移層から確認できるが、平面検出は地山まで下げてで行った。地形は南東に向かって緩やかに傾斜をしており、そのことは地山においても同様であった。攪乱は所々に見られたが、遺構の遺存状況は比較的良好であった。

今次調査では東に20m程離れたところも試掘調査を行ったが、ここでは耕土から1m程掘り下げると砂が一面に広がっているだけで、遺構・遺物を確認することはできなっかった。

2 住居址

① 46号住居址（挿図5）



調査区の北西隅で確認された住居址で、そのほとんどは調査区外にかかってしまったため規模・主軸等は全く不明であるが、形態は隅丸方形と思われる。壁はほぼ垂直に近く、検出面からは30cm程掘込まれていた。主柱穴・周溝は確認できなかった。

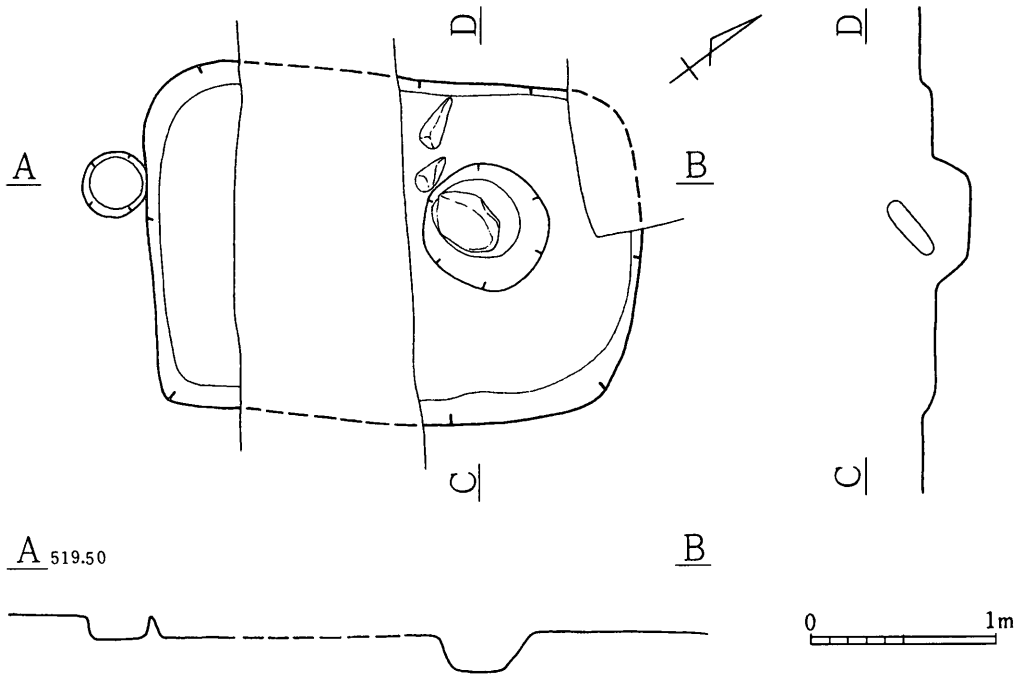
時期は出土遺物が土師器片・坏片が僅かに出土したのみであるので断定はできないが平安時代にあたると思われる。

挿図5 46号住居址

47号住居址（挿図6）

調査区ＡＩ28を中心にして検出した。カマドが既に壊れていたため主軸は正確には測定できないが、N55° W付近を示す。形態は隅丸長方形で、長辺が2.64m・短辺が1.84mを計り、深さは床面まで検出面から10cmである。床面は軟弱であり、明確には判断できなかった。柱穴は確認できなかったが、住居址の西側のピットが柱穴の一つに当たる可能性がある。カマドの天井石と思われる平坦な石の下に土坑が確認されたが住居址に付随するものかは不明である。

カマドの袖石付近から坏2個体と甕の破片・用途不明の棒状の土製品が出土した。出土遺物から平安時代に位置づけられる。



挿図６　47号住居址

③　48号住居址（挿図７）

調査区ＡＫ41付近でその一部を確認した。形態は断定できないが、確認できた範囲では一辺4.64ｍの方形であると思われる。主軸方向は判断できなかった。床面までは検出面から20㎝程であり堅固であったが、主柱穴はわからなかった。炉は調査範囲外のため確認できなかった。

弥生時代の土器片が数点出土しただけなので明確に判断はできないが、床面の状態から弥生時代と判断した。

3　建物址

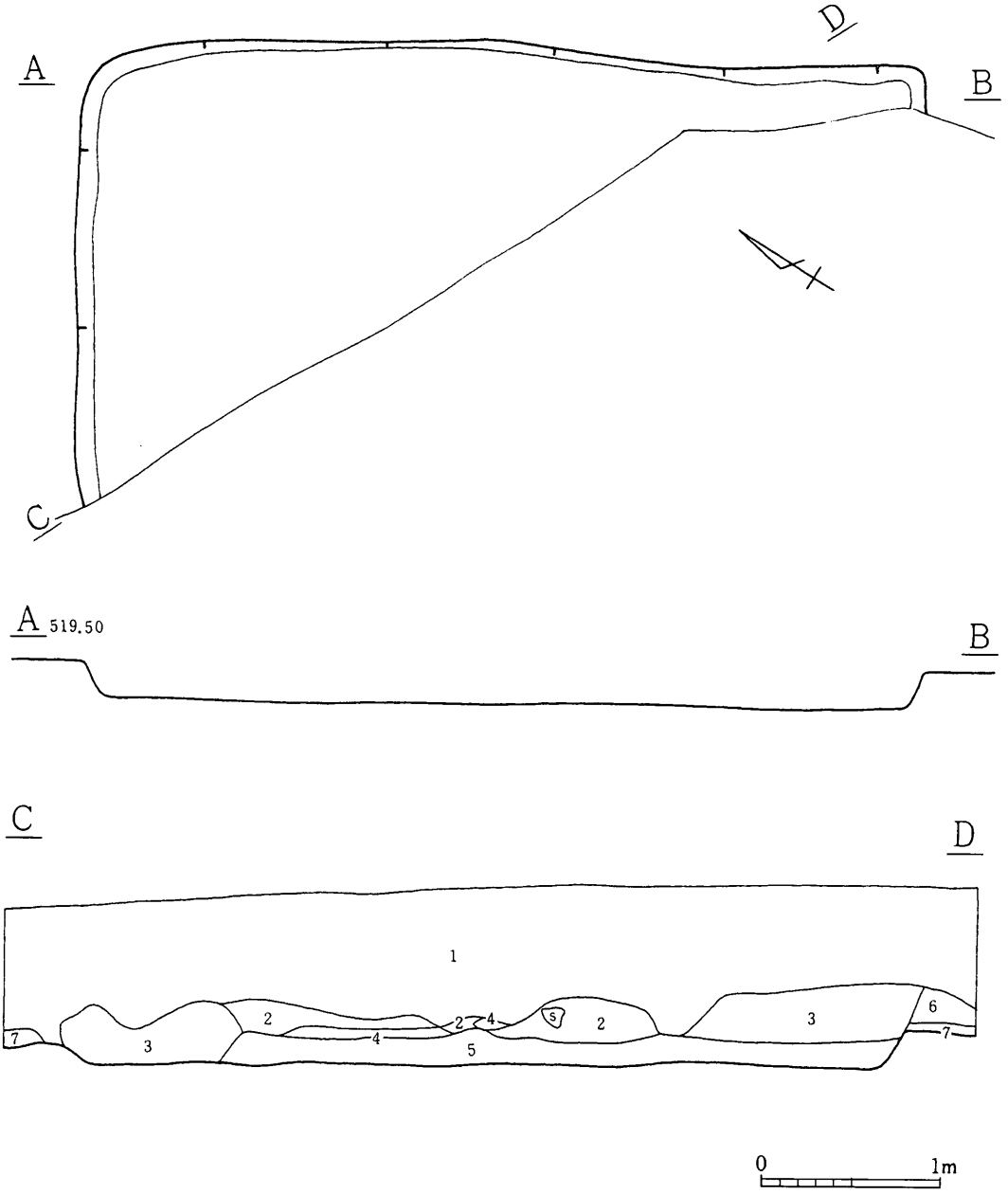
建物址７（挿図８）

調査区ＡＮ36を中心に確認した。柱穴掘り方の径は不揃いであるが、おおむね40～50㎝である。全体を調査できなかったので規模は不明であるが、確認できた範囲では柱間120㎝の２間×３間の建物である。方向はＮ22°Ｗを示す。時期は出土遺物がないので断定できないが、形態から中世と判断される。

4　溝址

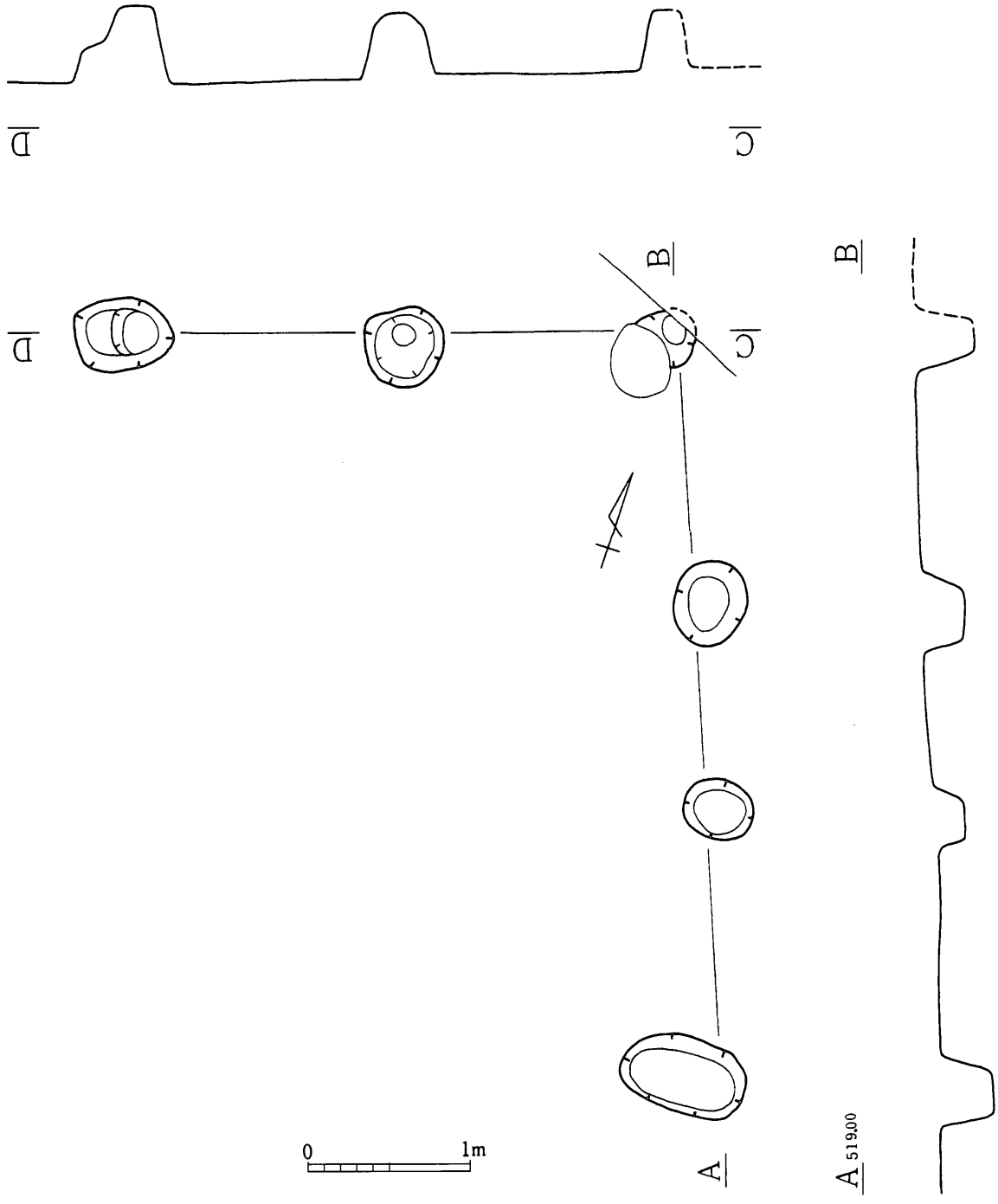
溝19（挿図９）

調査区ＢＡ19からほぼ南に向かって延びており、溝中央部の浸食が著しい。形状から自然流路と判断される。遺物もなく時期は不明である。



1．耕　土
2．焼土混　暗褐色　シルト質壌土
3．黒褐色　シルト質壌土
4．焼　土
5．炭混　黒褐色　シルト質壌土
6．暗褐色　シルト質壌土
7．暗褐色　シルト質壌土（6層より暗い）

挿図7　48号住居址

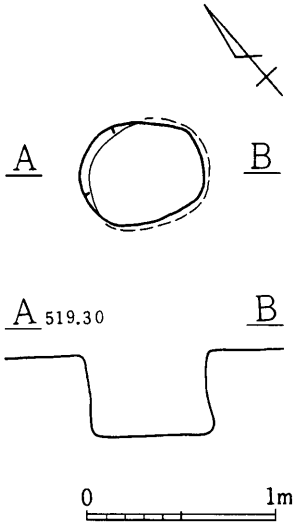


挿図8　建　物　址　7

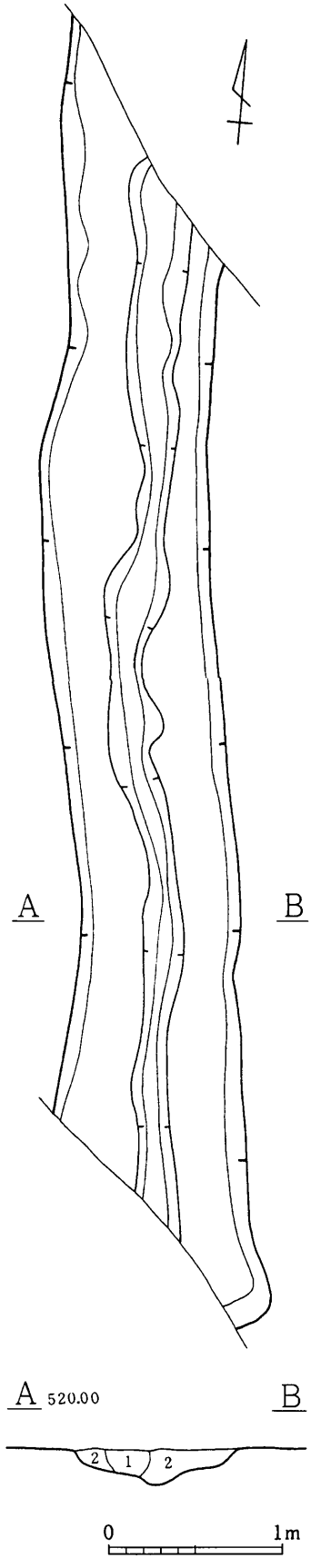
5　土坑

土坑110（挿図10）

調査区ＡＵ27で検出した。直径60cm程のほぼ円形で、掘込みは検出面から40cmの穴である。掘り方はほぼ垂直であるが、底部は僅かに袋状に広がる。土坑内から深鉢が出土しており、縄文時代中期中葉に位置づけられる。



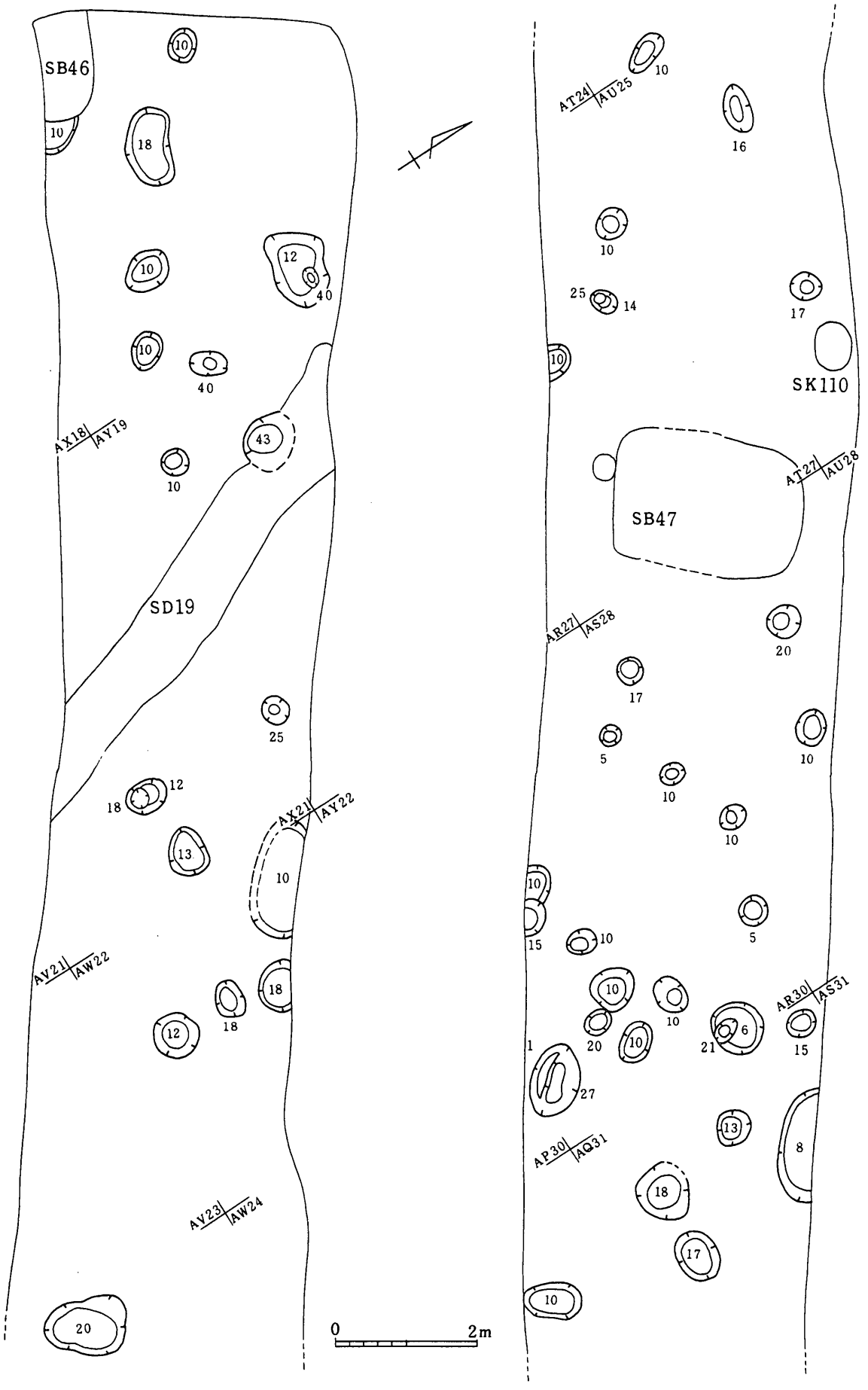
挿図10　土　坑　110



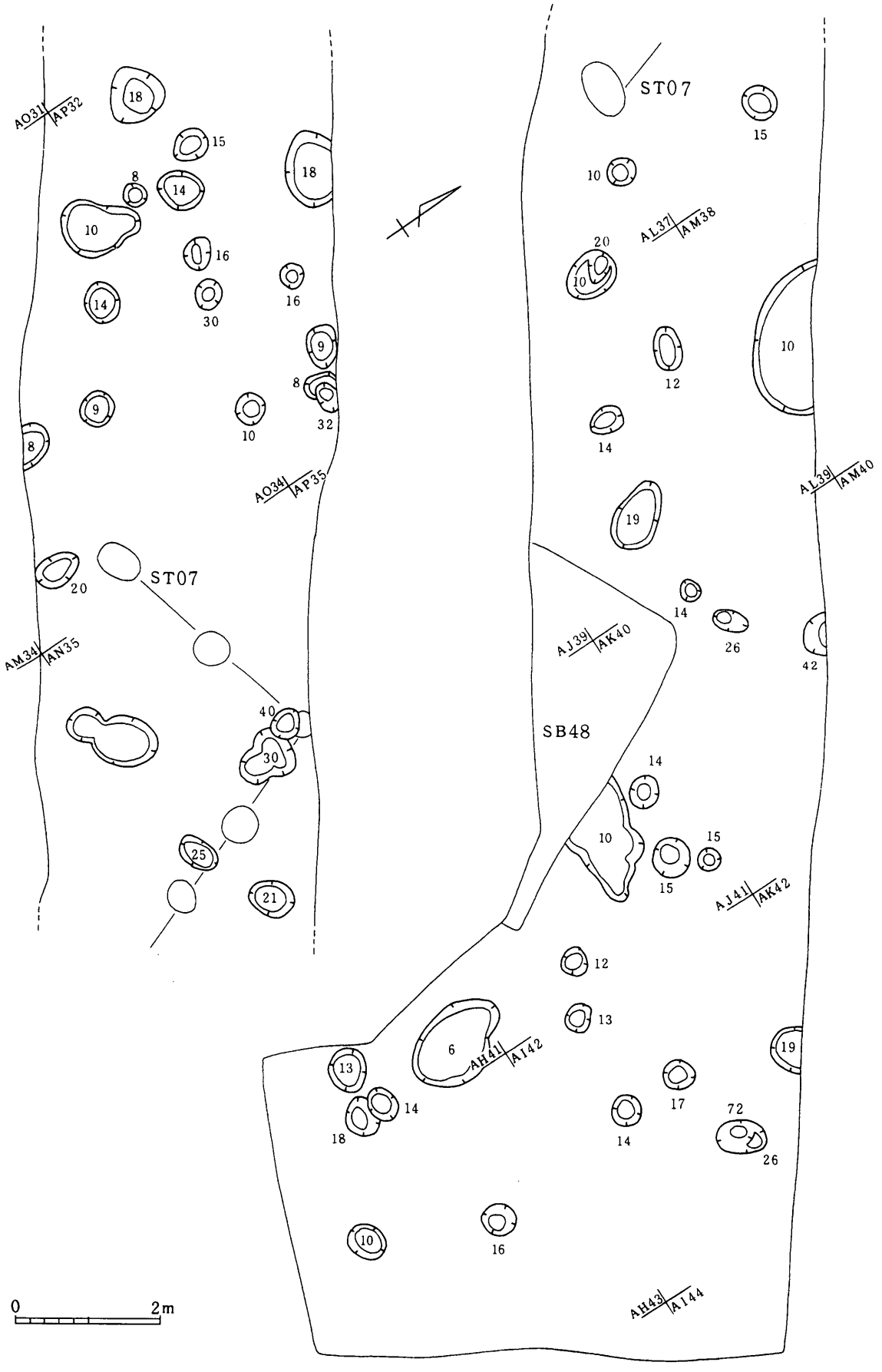
挿図９　溝　址　19

1　砂

2　暗褐色　シルト質壌土



挿図11　周辺ピット図(1)



挿図12　周辺ピット図(2)

Ⅳ　ま　と　め

今次調査は道路敷地部分のみという限られた範囲の中での調査であるが、過去の調査で縄文時代から奈良時代までの住居址と中世の掘立柱建物址が確認されており（『ツルサシ遺跡・ミカド遺跡・増田遺跡・垣外遺跡』 1989 上郷町教育委員会）それと照らし合わせて、今次調査で確認されたことを述べて、まとめとしたい。

縄文時代については、過去の調査で中期中葉の集落が確認されている。今次調査では土坑を確認したのみであるが、出土した遺物は同時期のものであり、当遺跡内の集落が東南隅の当該地周辺まで広がっていたことが予想される。

弥生時代については、今次調査でも住居址が確認でき、東南への集落の広がりがある程度把握できたと言える。今次調査の住居址は時期が明確に判断できていないので断定はできないが、当遺跡内の住居は当遺跡内東南隅まで点在して広がっていた判断される。

平安時代については、過去の調査では土坑が確認されたのみであり、集落の存在については推測の域を出なかったが、今次調査では住居址を確認することができ、同時代の集落が当遺跡内にも存在していたことが明らかになった。この47号住居址だけは、その大半が未調査に終わってしまった遺構が多い中で唯一、規模が小さかったため全体を調査することができた。しかし、カマドは既に壊れていて、その一部を確認するのみにとどまった。同規模の住居址は当市内では恒川遺跡群倉垣外遺跡でも確認されているが（『恒川遺跡　田中・倉垣外地籍』1991飯田市教育委員会）、同時期の小規模な住居址の中でもかなり小型である。古墳時代・奈良時代については新たな発見はなかった。

中世の掘立柱建物址は、遺物が確認できなかったので時代は明確に判断できないが一棟を確認した。しかし、現状では過去の調査で確認された掘立柱建物址との関係を論ずるのは不可能である。また、掘り方等、形態の似た柱穴が他にも確認できたので別の掘立柱建物址も存在していたと考えられるが、狭い範囲の調査では拾いだすことができなかった。

今次調査により当遺跡では縄文時代から各時代ごと、集落が断続的に存在していたことがが確認できたといえる。ただ、今次調査は範囲の非常に限られた中でのものであり、これにより当遺跡の集落の変遷を論ずることはできないが、今後も行なわれるであろう、当遺跡及び周辺遺跡の調査において、一つの指針となるであろう。

引用参考文献

『ツルサシ遺跡・ミカド遺跡・増田遺跡・垣外遺跡』　1989　上郷町教育委員会

『高松原Ⅱ』　1984　上郷町教育委員会

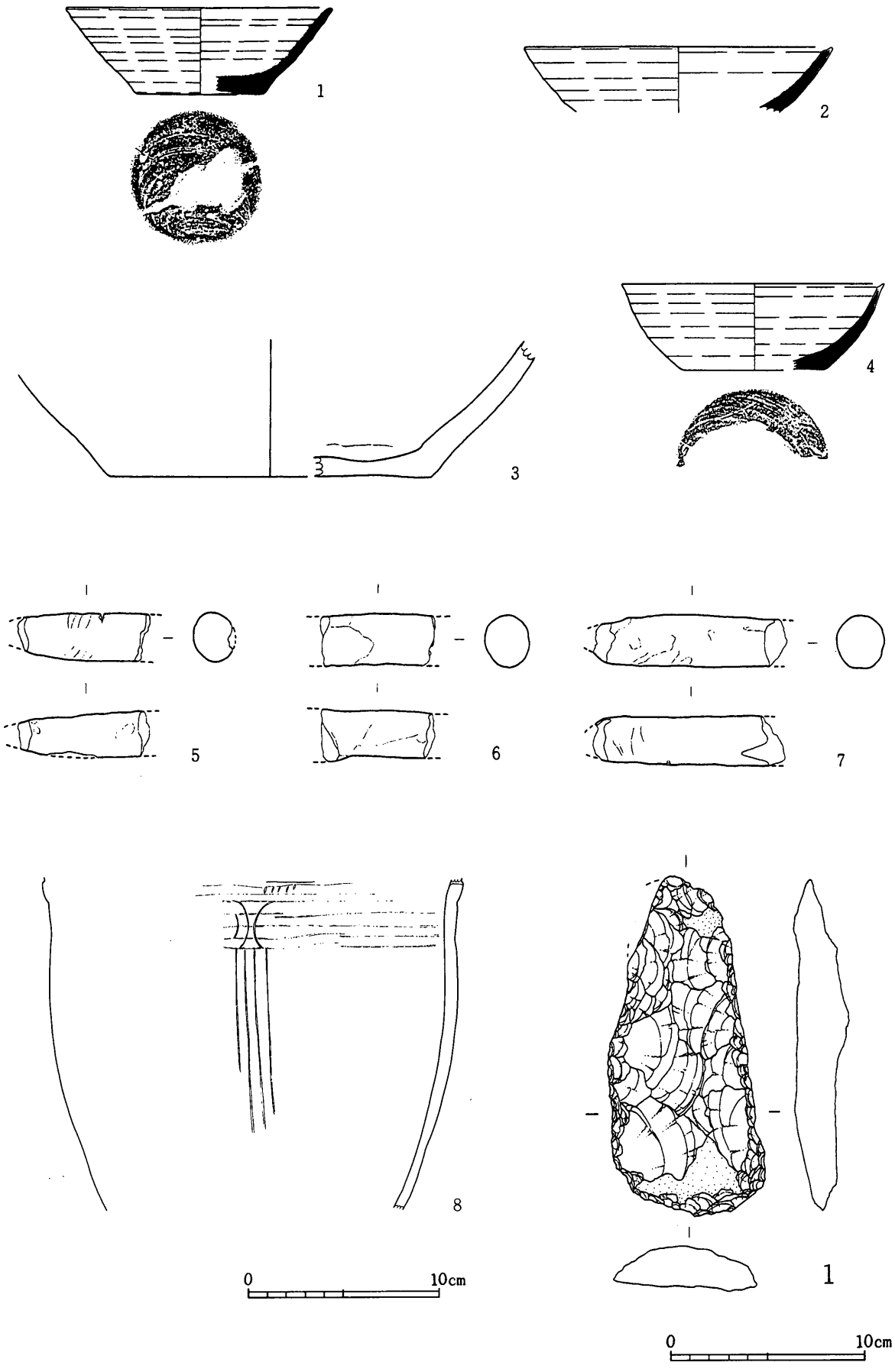
『恒川遺跡　田中・倉垣外地籍』　1991　飯田市教育委員会

『原の城遺跡』　1996　飯田市教育委員会

『長野県史』　1988　㈶長野県史刊行会

遺　物　図　版

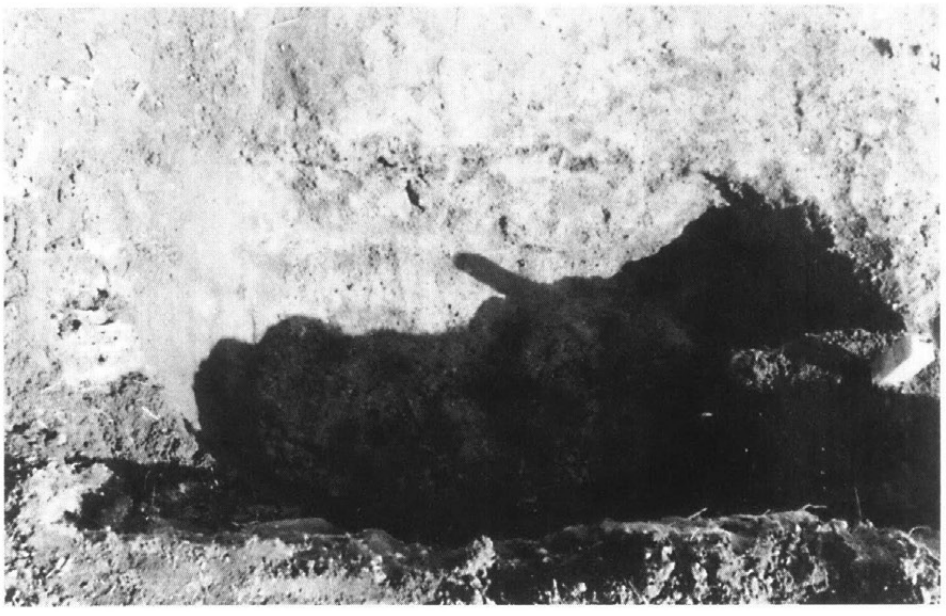
図版1



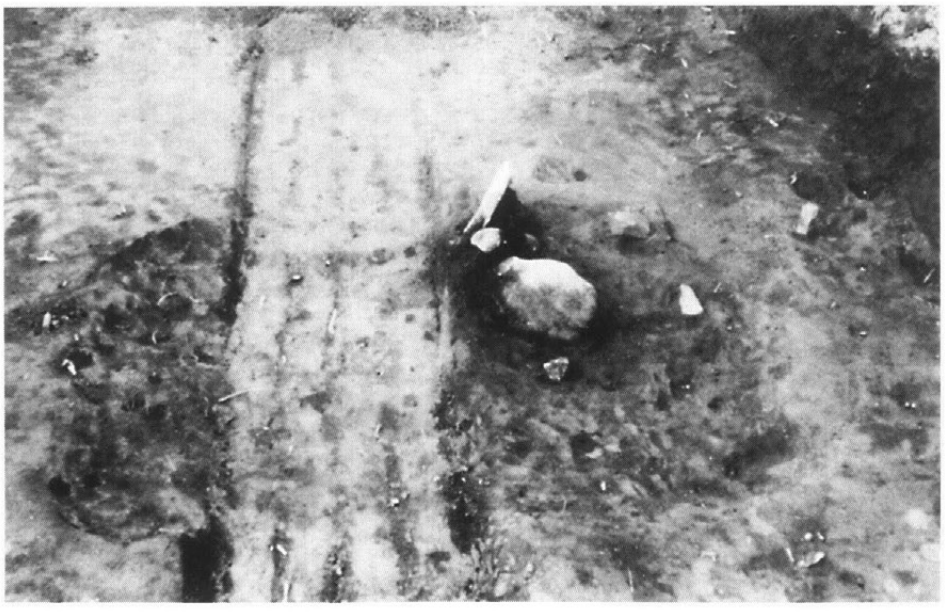
1～6　47号住居址、　8　土坑110、　7　AS27　グリットピット

写 真 図 版

調査前風景

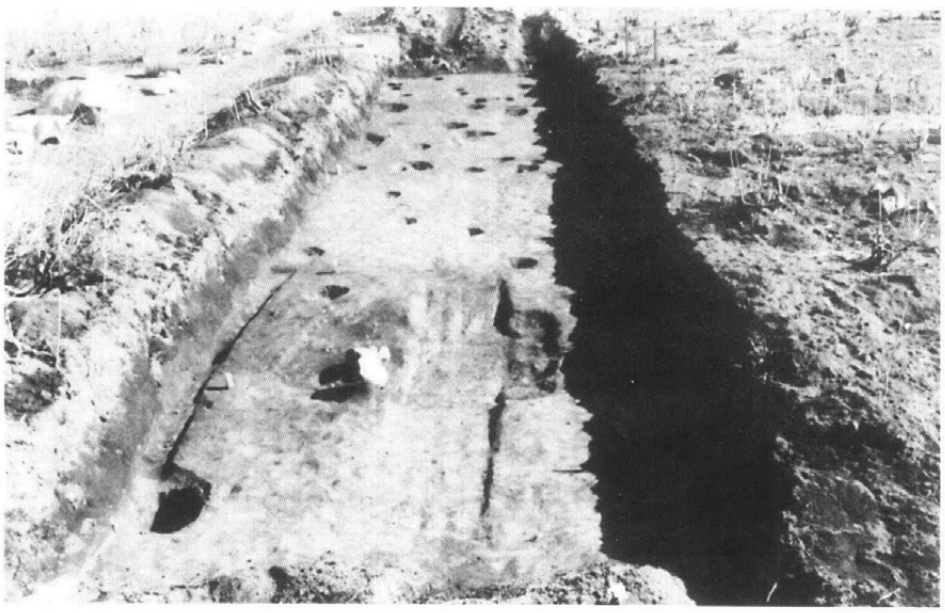


46号住居址



47号住居址

建物址　7



調査区全景

調査区全景

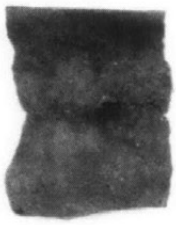
重機作業風景

基準点測量風景

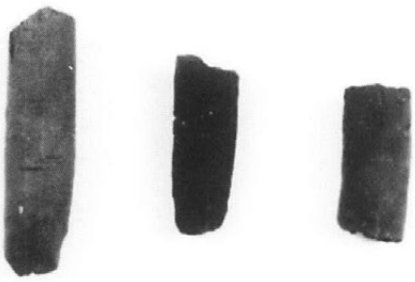
作 業 風 景

47号住居址出土遺物

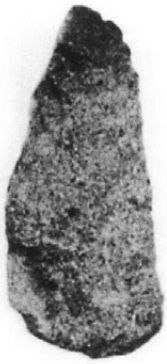
47号住居址出土遺物



47号住居址出土遺物



47号住居址出土遺物



47号住居址出土遺物

土坑110出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	くろだかいといせき
書　　名	黒田垣外遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	伊藤尚志
編集機関	長野県飯田市教育委員会
所 在 地	〒395－0002　長野県飯田市上郷飯沼3145番地　☎0265（53）4545
発行年月日	西暦1998年2月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
くろだかいと 黒田垣外	いいだしかみさとくろだ 飯田市上郷黒田	2053		35° 31′ 15″	137° 50′ 06″	平成9年2月1日 から 平成10年2月27日	300㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
黒田垣外	集落址	縄文 弥生 平安 中世	土坑　1基 竪穴住居址　1軒 竪穴住居址　2軒 掘立柱建物址　1棟	縄文土器 須恵器	

黒田垣外遺跡

発　行　日　　平成10年2月27日

編集・発行　　長野県飯田市上郷飯沼3145
飯田市教育委員会

印刷・製本　　ヨシザワ印刷株式会社